鳥取臨床科学 12(2), 104-110, 2020

家族が認知症者を受容するために必要なものの検討

～家族教室参加者への面談を通して～

島津光子[1)]　梅田博美[1)]　多内康博[1)]　岡田雅人[1)]　山口里美[1)]　川谷みのり[1)]　中川康江[2)]
1）国立病院機構鳥取医療センター看護部 7 病棟
2）鳥取看護大学看護学部看護学科

Examination of the needs of family members to accept care recipients with dementia

―Based on interviews with family member class participants―

Mitsuko Shimazu[1)] Hiromi Umeda[1)] Yasuhiro Tauchi[1)] Masato Okada[1)] Satomi Yamaguchi[1)]
Minori Kawatani[1)] Yasue Nakagawa[2)]
1) The 7th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center
2) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing

要旨

認知症治療病棟の役割として，認知症の周辺症状（以下 BPSD と略す）を軽減し，認知症者が住み慣れた地域で暮らすことが出来るように支援することがあげられる．入院した多くの患者は，薬物療法や環境調整などの非薬物療法により BPSD が改善し，地域で暮らすことが出来る状態になっているが，家族が退院を躊躇し退院支援が進まない現状がある．このような中, A 病院 B 病棟で行っている家族教室に参加した家族から，家族教室に参加する前に比べて患者に対する肯定的な発言や，退院に対して前向きな姿勢がみられることに気づいた．これにより，家族教室に参加することで，家族が患者の受容に向かった心の変化を来たすのではないかと考え，今回，認知症者を介護する家族の気持ちの変化に，当院の家族教室がどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的に研究を行った．家族教室に参加した家族にインタビューを実施した結果，家族教室に参加し知識を身に付け，同じ経験を持つ他家族と交流することで心の余裕ができ，認知症者を受け入れる心の変化が生じることが明らかになったのでここに報告する．鳥取臨床科学 12(2), 104-110, 2020

Abstract

The role of the dementia treatment ward is to reduce the behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) and to support care recipients with dementia so that they can live in familiar surroundings. Many inpatients have improved BPSD due to pharmacotherapy and other methods such as environmental adjustment, and have now the potential to live in the local community, but many family members feel hesitation concerning hospital discharge and discharge support does not progress. The family members who participated in the family member class held in Ward B of Hospital A made more positive remarks to the patients and

exhibited a more positive attitude toward discharge compared with before participating in the class. As a result, we hypothesized that participation in a family member class would bring about changes in the minds of family members regarding acceptance of the patients. Therefore, the principal aim of the present study was to clarify the role of our family member class in changing the feelings of family members caring for patients with dementia. The results of interviewing the families who participated in the family classroom indicated that by participating in the family member class, acquiring knowledge, and interacting with other family members who have the same experience enabled them to relax emotionally and to encourage them to accept the patients with dementia. Tottori J. Clin. Res. 12(2), 104-110, 202

Key words: 認知症, 家族教室, 介護家族, 退院支援, 家族の気持ちの変化, 患者の退院受容; dementia, family member class, long-term care family member, discharge support, change in feelings of family members, acceptance after patient discharge

はじめに

認知症は元のように治る疾患ではなく，多くが進行性である．昨年の看護研究 [1] で明らかにした「認知症者を介護する家族の思い」では，家族は日常の介護全般に対する負担に加えて，認知症特有の精神症状や行動障害への対応に大きな負担感とストレスを感じており，同時に先の見通しがつかないことで不安を感じているという結果が出ている．奥野ら [2] は，「家族介護者にとって認知症高齢者はかけがえのない存在であり，それゆえ認知機能が障害された高齢者の介護は悲嘆の伴う困難な作業となる.」と述べている．入院時には大切な家族を他者の手に委ねることに罪悪感を持つ家族も少なくないが，同時に，入院したことで患者の居場所ができたことを喜び，専門職である医療者に患者を任せ認知症者に振り回されることなく自分たちの生活を送ることができるという安堵を感じている家族も多い. A 病院 B 病棟は，認知症治療病棟開棟から 3 年が経過し様々な症状をもつ患者を受け入れ，また様々な思いをもつ家族と関わってきた．その中で，入院直後は頻回に面会に来ていた家族も入院期間と反比例して面会の回数が減り，最後には荷物だけ置いて患者に面会しないで帰ろうとするなど，入院をきっかけに患者と家族の関係が希薄化しやすいという問題点が見えてきた．入院時は自宅退院を希望していても，退院時期が迫ると施設への退院や入院の延長を希望する家族も多くみられる．

認知症問題は，本人がその後の人生をどう生きるかということと共に，それを支える家族がどう暮らしてゆくかという問題でもある．B 病棟では，認知症の基礎的知識や本人への接し方の基本を学び一緒に生活する力を高めることを目的に，医師，看護師，作業療法士，心理士，精神保健福祉士により, 4 回 1 クールで家族教室を実施している．この家族教室に参加した家族の多くから，家族教室に参加する前に比べて認知症者に対する肯定的な発言や退院に対して前向きな姿勢が見られた．認知症者と家族の関係が希薄化することなく，認知症者がスムーズに住み慣れた地域での生活に戻れるようにするために，今回，家族の気持ちの変化に家族教室が果たしている役割を明らかにし，家族が必要とする支援を知る必要があると考えた．

I. 研究目的

家族教室に参加した認知症を有する患者を持つ家族を対象に，家族教室に参加した感想，参加したことによる気持ちの変化についてインタビューを実施し，認知症者を介護する家族の気持ちの変化に，当院の家族教室がどのような役割を果たしているのか明らかにすることを目的とする．

II. 研究方法